

学びは暮らしの中にある

前川良太

今年の2月、長野県にある伊那小学校の公開研究授業を見学してきました。この学校は、60年以上も通知表がないことで知られています。伊那小は、公立のふつうの小学校です。でも、その日々はとてもユニークでした。授業の多くが「総合学習」で、ピザを作るなら粉の配分で算数を学び、材料からは理科や社会につなげ、さらにはピザ屋さんを訪ねるような学びが展開されていました。教室の外では子どもたちが自由に駆け回り、「チャボに虫がついたから自分たちで調べた方法で薬を作ってるの」と話す姿に驚かされました。1年生の授業は「林に出かけよう」という活動で、自然の中を思い思いに楽しむ子どもたちに、大人はそっと寄り添います。そこには「教える」よりも、「ともに暮らし、気づきを分かち合う」大人の姿がありました。その光景を目の当たりにして、「保育園は生活の場、学校は学びの場」と切り分けて考えていた自分の思い込みが、すうっとほぐれていくようでした。日々の保育の尊さが、あらためて深く心に染みてきました。



そんな日々の中で育つ子どもたちの姿に、アトムやつばさでの日常と重なるものをたくさん感じました。子どもが自分で感じ、考え、動き出すことを大切にする私たちの保育と、どこか通じるものがあったのです。決して友だちと仲良くする“方法”だけを教えることはしませんし、そのために実感が伴わないうちから形だけ謝らせるようなことはしません。じっくりじっくり時間をかけながら、時には「そんなんでいいん？」と言いたくなるようなことでお互い折り合いをつけたりします。

今年から小学校へ通うようになった我が家の長男も、3月まではアトムっ子でした。そんな息子も学校からの宿題に私の隣で取り組みながらぽつりと「僕な、プリントで字を勉強するのが好きじゃないねん。お手紙書いたりするのは好きやねんけどな。」そう話していました。これは、ただの勉強嫌いというよりも、「伝えたいことがあるから字を覚えたい」という気持ちに根ざした学びと、やらされるだけのプリント学習との違いを、彼なりに感じているのだと思います。現に、就学前には好きな図鑑を読んだり、YouTubeの検索を自分で入力したりしながら「字って便利やなあ」とも話していました。

幼児期もそうですが小学校低学年くらいまでは特に、手足を動かし、生活に即した中で「感じて、発見する」ことが学びの中心です。体験を通して意味づけがなされてこそ、知識は自分のものになります。幼児期の子どもたちと過ごす皆さんは、そのことをきっと日々感じておられるのではないのでしょうか。



もう一つ、心に残ったのは「地域とのつながり」です。伊那小は、地域の子どもの通うふつうの公立小学校ですが、保護者や地域の人々がこの教育のかたちを理解し、支えているとのこと。スタンダードからは少し離れた学校かもしれませんが、「歴史の中で地域に根づいてきた」との説明がとても印象的でした。「地域で子どもを育てる」という文化が、暮らしのなかに当たり前のものとして息づいている。そんな様子に、深く心を打たれました。

熊取町でも私たち民間園の園長、公立保育所長、学校長、役場の関係課と一緒に架け橋プログラム※を一緒に対話しながら作っていくことになりました。それぞれの立場が、子どもの姿を見つめながら語り合える関係を少しずつ育んでいます。ぜひ子育てする皆さんの声もお聞きしながら、「子どもが安心して育っていけるまち」を、いっしょにつくっていければと願っています。

※年長、小1の接続時期を架け橋期と呼びます。その架け橋期には保幼小一体的なカリキュラムの作成が必要とされています。